

旧ふれあいの里奥出雲公園における 亜種アカショウビン *Halcyon coromanda major* の現況

星野由美子*・市橋直規**・仲村昇***

Status of Ruddy Kingfisher *Halcyon coromanda major* at former Fureainosato Okuizumo Park

Yumiko Hoshino, Naoki Ichihashi and Noboru Nakamura

Abstract

Two subspecies of Ruddy Kingfisher *Halcyon coromanda* breeds in Japan, *H. c. major* and *H. c. bangsi*. *H. c. major* breeds in former Fureainosato Okuizumo Park, Shimane pref.

During bird surveys from 2008 to 2014, many Ruddy Kingfishers were recorded in the park from May to August. Total banded numbers for the 7 breeding seasons were 33, including 27 individuals and 6 recaptures. Several banded individuals were confirmed to visit the park for consecutive years.

キーワード: アカショウビン, 生息状況, 標識調査, ジオロケータ

keyword: Ruddy Kingfisher, Status, bird banding, Geolocator

1. はじめに

アカショウビン *Halcyon coromanda* は、溪流のある森林を好む夏鳥である。5月に東南アジア方面から日本に渡来し、よく茂った落葉広葉樹の林で繁殖する(柏木, 2008)。その美しい声と姿は、多くのバードウォッチャーあこがれの鳥の一つである。また、姿が見られる、撮影ができるという情報が流れると、多くのバードウォッチャーが殺到することもある人気の鳥である。

しかし、その生息数は多くなく、環境省のレッドリストにはのっていないものの、各都道府県レベルでは、各地域のレッドデータブックに絶滅危惧Ⅰ類～準絶滅危惧種に名を連ねている。

日本には、亜種アカショウビン *Halcyon coromanda major* と亜種リュウキュウアカショウビン *Halcyon*

coromanda bangsi の2亜種が生息する。南西諸島に生息する亜種リュウキュウアカショウビンについては、少しずつ調査が進んでいるが、主に本州で繁殖する亜種アカショウビンは、東南アジアの一部地域での越冬が知られているものの具体的な越冬地や渡りルートについてはほとんど解明されていない。

これまで、旧ふれあいの里奥出雲公園内で鳥類の生息状況調査を行ってきたところ、当地ではアカショウビンの生息数が多く、標識調査においても継続した生息が確認された。今回は、調査地内でのアカショウビンのこれまでにわかった生息状況について報告する。

2. 調査地概要

旧ふれあいの里奥出雲公園(以下、公園とする)は、鳥根県中部の雲南市掛合町波多にあり、面積約180ha

* 鳥根県立三瓶自然館, 〒694-0003 鳥根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan

** 日本鳥類標識協会 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 115 (公財) 山階鳥類研究所鳥類標識センター内

Japan Bird Banding Association, Bird Migration Research Center, 115 Konoyama, Abiko, Chiba, 270-1145, Japan

*** (公財) 山階鳥類研究所 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 115

Yamashina Institute for Ornithology, 115 Konoyama, Abiko, Chiba, 270-1145, Japan

の森林を中心とした標高350～615mの起伏に富んだ公園である。

公園の入り口は南側にあり、標高約430m付近に駐車場、管理用施設、宿泊施設、遊歩道、芝生広場などの人と自然とのふれあい施設がまとまっている。これらの施設エリアは約10ha程度でほぼ草地となっていて、一般利用施設の面積は全体の5%程度に過ぎない。その他の部分は、コナラ *Quercus serrata* やアベマキ *Quercus variabilis* を中心とした落葉広葉樹林にアカマツ *Pinus densiflora* やスギ *Cryptomeria japonica*、ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* の針葉樹がモザイク状に混在している。また施設エリアと樹林との境界付近には約80m²の貯水池がある。園内を南から北西にほぼ縦断する形で流れる深い渓谷には、東西の斜面から幾筋もの谷が落ち込み、水量が豊富な渓谷となって神戸川へと合流している。また、公園周辺も同様の環境が広がっており周辺森林面積は800haを超える。

しかし、近年、カシノナガキイムシ *Platypus quercivorus* 等によるナラ枯れが発生するなど、ナラ類の大木が枯死する状況にあり、その対応のため調査地内の約10haの森林が皆伐された。さらに、公園に隣接する私有地の森林の約100haほどが皆伐されるなど、公園の周辺を含む森林環境は、ここ5年程度で大きく変化してきている。

3. 方 法

調査はラインセンサス法による基礎調査と環境省リングを装着する標識調査、そして標識調査の際に周辺で確認された鳥類を記録する重点調査の3通りで実施した。

調査の対象とした期間は4～12月とし、1～3月は積雪のために入園が困難になるため、調査期間からは外した。

基礎調査は、2008～2009年および2013～2014年の4カ年実施し、4～12月の間に、1カ月に1～2回の頻度で決められた調査ルートを歩きながら、双眼鏡を用いて目視と鳴き声によって生息を確認して記録した。

標識調査は、2008～2014年の7年間にわたって実施した。年によって時期や頻度が異なっているが、5～11月の間に年間2～4回、それぞれ連続した2～4日間で行った。捕獲には、基本的に30または36メッシュのカスミ網(高さ2.5m、長さ12m)を用い、状況によって61メッシュや長さ6mのものを用いることもあった。網は、公園内の森林内部、林縁部、溪流沿いの鳥が通過しそうな場所を選び、10枚程度の使用を基本

とし(2012年以降は20枚程度)、2～3カ所に設置した。なお、本標識調査においては鳥類の捕獲や取り扱いに高度な技術をもつ鳥類標識調査員を中心とした特別チームを編成した。

重点調査は、標識調査の際に併せて実施し、標識作業場所やかすみ網設置場所付近で調査時間内(主に日の出1時間前から日没後1時間程度)に、目視や鳴き声で生息を確認して記録した。

調査日数は、基礎調査が4ヶ年で35日、標識調査および重点調査が7年間で73日、あわせて108日実施した。

さらに、調査以外の重要情報についても、検討に加えた。とくに初認日(時期)は、公園スタッフの聞き取りなどを総合的に判断して記録に加えた。

種名の表記は、原則として日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会、2012)に従った。

4. 結 果

アカショウビンは、すべての年で5月下旬には渡来が確認された(表1)。また、調査日においても、すべての年(調査未実施月除く)において6、7月には生息が確認された(表1)。標識調査における放鳥数は、7月が最も多く21羽、次いで6月が8羽であった。総放鳥数は延べ33羽であった。

標識調査では、個体識別が可能であり、同一個体が数年間にわたって渡来していることも確認された(表2)。複数の年に確認された個体は3個体(③、⑦、⑮の個体)であり、2008年に成鳥で放鳥された個体③は、その後4年連続の渡来が確認された。また、2009年に成鳥で放鳥された個体⑦も、2012年まで断続的に確認された。再放鳥の個体数を勘案すると確認した個体数は27羽であった。

5. 考 察

アカショウビンは長野県においては5月下旬に渡来して6月上旬から造巢し、6月下旬には産卵、抱卵して7月頃から育雛がはじまるとされている(柏木、2008)。また、広島県の臥竜山においては5月初旬に渡来し、9月下旬まで留まって繁殖活動を行っている(上野ら、2001)。当地においても、渡来初認は5月上旬から中旬となっており、6～7月の放鳥数をもっとも多い。また、園内のスズメバチの古巣において2007年に営巣が確認されたときも、6月中旬に造巢していることが発見され、7月上旬には盛んに給餌が行われていた。巣立ちの瞬間は確認されなかった

表1 アカシヨウビンの確認の記録

	初認日 (確認者)	5月	6月	7月	8月	9月	合計
2008年	5月5日 (星野)		4	1			5
2009年	5月中旬 (聞きとり)		0	4			4
2010年	5月9日 (星野)	1		4		1	6
2011年	5月中旬 (聞きとり)		2	3			5
2012年	5月中旬 (聞きとり)		0	4	1		5
2013年	5月中旬 (聞きとり)		2	4	0		6
2014年	5月19日 (星野)		0	1	1		2
合計		1	8	21	2	1	33

*数字は標識調査放鳥数(数字の記入がない部分は標識調査をしていない)

- は、基礎調査あるいは重点調査で生息を確認
- は、基礎調査や重点調査で確認できなかった月
- は、調査未実施月

表2 ふれあいの里奥出雲公園におけるアカシヨウビン放鳥の記録

個体番号	ジロケータ	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	
①		成鳥							
②		第1回夏羽							
③		成鳥	成鳥	成鳥	成鳥				
④		第1回夏羽							
⑤		第1回夏羽							
⑥			成鳥						
⑦	I		成鳥	成鳥		成鳥			
⑧			成鳥						
⑨				成鳥					
⑩				成鳥					
⑪				成鳥					
⑫				幼鳥					
⑬					成鳥				
⑭					成鳥				
⑮	II				成鳥		成鳥		
⑯					成鳥				
⑰	III					成鳥			
⑱	IV					成鳥			
⑲	V					成鳥			
⑳						幼鳥			
㉑	VI						成鳥		
㉒	VII						第1回夏羽		
㉓	VIII						成鳥		
㉔	IX						成鳥		
㉕							成鳥		
㉖	X							成鳥	
㉗	XI							成鳥	
合計	27	11	5	4	6	5	5	6	2
		うち新放鳥数	5	3	4	4	4	5	2

が、8月上旬には姿を見せなくなった。このことから、長野県や広島県臥竜山の例とほぼ同じ時期に繁殖していると考えられる。

また、個体識別が可能な標識調査においては、2008年に成鳥で初放鳥された個体③や2009年に初放鳥された個体⑦などは、翌年以降も連続あるいは断続的に渡来が確認されたこと（表2）から、当地は継続的に利用されている繁殖地であると推察される。また、いずれの個体も初放鳥の際には、すでに成鳥だったことから推定年齢5歳以上の個体が渡来していることもうかがえる。

6. 今後の展開

アカショウビンは、日本各地に夏鳥として渡来し、冬は東南アジア方面で越冬するとされている。しかし、その渡りルートや詳細な越冬地などについては、まだ解明されていない。

公園における本調査において、同種が定期的に渡来していることが判明したが、全国の標識調査結果をまとめた鳥類標識調査報告書（山階鳥類研究所、2013）によると、アカショウビンが同じ場所で次のシーズンに再捕獲・放鳥されることは全国的に稀である。再捕獲は当地の特徴であり、今後も継続調査を実施するメリットが高い場所である。

そこで、山階鳥類研究所と共同で、本種の渡りルートや詳細な越冬地を解明するため、標識調査により捕獲した個体にジオロケータ（照度記録装置）を装着することとした（図1）。ジオロケータは、約1.5g程度のごく軽量の器機で、内蔵された照度計により照度のみを記録する。器機を回収してデータを出力し、日出と日没時間を判定して緯度経度を算出することで位置

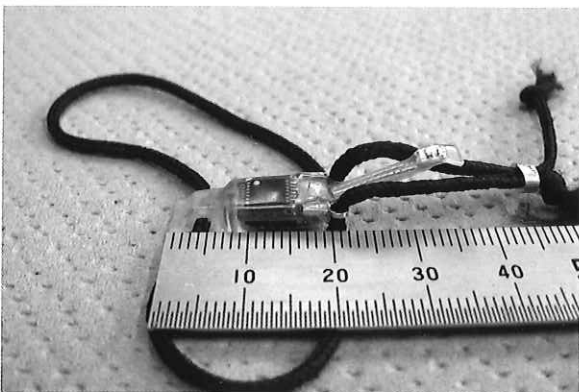


図1 アカショウビンに装着するジオロケータ(照度記録装置)

情報を推定する。類似の調査は、鳥取県などにおいて夏鳥のブッポウソウ *Eurystomus orientalis* で、すでに行われており（佐藤ら、2011）、越冬地の解析成果がある。本種の越冬地が判明することが期待される。

7. 調査チーム

調査チームの編成は次のとおりである。市橋直規、勝野史雄、木戸光代、木村祐一、栗原幸則、古園由香、小林徹、仲村昇、中森沙希、中森純也、鳴海末信、森茂晃、星野由美子（いずれも環境省鳥類標識調査員）

謝 辞

とくに標識調査にあたっては、安藤温子、黒田聖子、豊田暁、深谷治、森河貴子の各氏にご助力をいただいた。

2008～2009年にはふれあいの里奥出雲公園のスタッフのみなさんに、2011～2014年にはさえずりの森スタッフのみなさんに、物心両面でのご協力をいただいた。土地および施設所有者である鳥根県（自然環境課）にもさまざまな面でご配慮をいただいた。また、多くの方から生息情報をご提供いただいた。この場をかりて心よりお礼申し上げる。

引用文献

- 上野吉雄・河津功・安井浩・小柴正記（2001）広島県臥竜山におけるアカショウビンの繁殖生態。高原の自然史6:59-75
- 柏木健一（2008）アカショウビンの生態研究。BIRDER SPECIAL 華麗なる水辺のハンター:70-73
- 佐藤文男・仲村昇・飯田知彦・菊池博・桐原佳介・土居克夫・土井安彦・原徹・尾崎清明（2011）ジオロケータを用いたブッポウソウとマミジロの渡り追跡。日本鳥学会2011年度大会講演要旨集:48
- 中村浩志・柏木健一（1989）アカショウビンの繁殖生態と雛への給餌餌内容。信州大学志賀自然研究施設研究業績第26号:15-24
- 日本野鳥の会鳥根県支部（2008）フィールドノート。スペキュラム（124）:4.
- 山階鳥類研究所（2013）2011年鳥類標識調査報告書。94p